
恋をしないなんてことはない

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋をしないなんてことはない

【Nコード】

N8797M

【作者名】

きみよし藪太

【あらすじ】

結婚したら、揺らぎない穏やかな日常が手に入ると思っていた。

夫以外に恋なんてすることはないのだと。

十才年下の男の子は、とてもわたし好みの顔をしている。

彼がわたしを好きかどうかなんて、本当は重要なことではないのだ。分かったのはただ、結婚しても人は、少なくともわたしは恋をしてしまうということ。

結婚したかったのは自分専用の男が欲しかったからだ。恋などという、自分を消耗するだけの激しい感情から早く解放されて、奪うだの取られるだの焦がれるだのという不安定な状態から一抜けするために、結婚がしなかった。という言葉を、十代のころに好きな作家が書いているのを読んで、結婚とは自分の為だけに存在する男の人を手に入れることなのだと、ひどく懂れた。当時のわたしは引込み思案で恥ずかしがり屋で、人と接するのが苦手なくせにほんの少し仲良くなったりした男の人にはすべて恋をしてしまうような馬鹿げた状態の小娘で、好きな人が他の女の子と喋ったとか肩に手を触れただとか、仲良くじゃれ合ったとかいうのを見ては嫉妬して落ち込んで、ただただ疲れる毎日を送っていた。

結婚したら、他の男の人を好きにならなくてすむ。

夫になる人だけを愛し、心は風の海のように静かで穏やかに暮せるのだと、信じていた。

結婚して、三年程が経つまでは。

「公くん、インスタントでよければコーンポタージュもあるよ」

パート先のホームセンターで知り合った、アルバイトの公くんはわたしよりも十才若い二十一歳で、背が高くて薄っぺらい。賢そうな一重の目をしていて、痩せっぽちなのに驚くほどご飯を食べる。大学生で一人暮らし、自炊はできないという彼は、いつの間にかわたしの家に時々ご飯を食べにくるようになった。夫のいない、昼間だとか、出張中の夜だとかだけだ。公くんはすばしっこい野良猫の外見で、中身は人懐こいけどちょっぴり臆病な大型犬だ。

「ポタージュ、苦手」

「どうして？」

「なかなか冷めないから。俺、猫舌」

外見だけでなく舌も猫なのか。

「そんなの知らなかった、じゃあおうどんとかも苦手だった？」

「うどんは好きだから、ふーふーして食う」

唇を尖らせて、彼はふーふーと何も無い空間に息を吹きかける。その仕草が可愛らしい。昨日の晩ご飯の残りだった鶏の甘酢がけもつけ合わせだったほうれん草の醤油味のパスタもぺろりと平らげたので、焼きそばくらいならすぐに作れるよ、と言ったらしい返事がきた。底抜けに明るい、うん食べる、のすっきりした声。自分ひとりのとき用の、冷凍しておいた焼きそばを解凍して、冷蔵庫にあった豚肉ともやしとキャベツと一緒に炒める。ソースの焦げる匂い。キッチンの椅子に座っていた公くんは、コンロの前に立つわたしの背後からいつの間にか覗き込んでいる。

「美味しいね」

「まだ食べてないじゃない」

「匂いが美味しい」

「そう、良かった」

「食べたらかきつともっと美味しいと思う」

冷蔵庫から勝手に牛乳を出してもいい、と聞かれて、いいよ、と返事をする。勝手に出してもいい、と聞くのは、ちっとも勝手に出していないじゃない、と言うのだけれど公くんはきょとんとするばかりだ。

「お腹空いてるのね」

「朝ご飯食べなかった、昨日の夜は酒飲んでたらそのまま寝ちゃった」

「お家で飲んでたんだ」

「実家から消費する人いないしってビールだけどっさり届いたからわたしの生活とはまったく関係のない話を聞くのが好きだ。公くんの暮らし。わたしと重なり合わない部分での彼。聞いて想像する。ダンボールいっぱいビールをどうにか冷蔵庫に収めている公くん。朝ご飯も食べずにベッドで丸くなる公くん。ビールの空き缶が転がる部屋でうとうとしている公くん。」

結局焼きそばどころではなく、明日の朝食用に買っておいたパンにスライスチーズをのせて焼いたものを二枚と、同じく朝食用のヨーグルトをふたつ平らげて公くんは一息ついた。断ってから勝手に出した牛乳も、ほとんど手付かずだったのに飲み干してしまった。

こんなに食べるのに、どうしてこの子は痩せっぽちなんだろう。腹筋があるのか、大量に食べたご飯はすこしもお腹をぼっこりとさせない。

「満足した、いいよね、ご飯作れる人って」

「じゃあ彼女作るんなら料理のできる人にすればいいと思う」

「え、料理のできない子でも、ここに食べに来るからいいよ」

恋人になったその娘も？ と聞きたくて聞けないでいる、まだ実在することのない存在に嫉妬するほどバカらしくて労力を使うことなんてきつとない。

お腹がいつぱいの公くんは体温が少し上がる。

居間のソファでだらりと寝そべって、お皿を洗い終わったわたしを待っている。半分眠ったような顔をして。

「おいで」

大人みたいな声で言うから、うん、とわたしは子供じみた声になる。バランス。それは美しい均整の採れたバランスではなく、危うく今にも共倒れになりそうなあやふやな地点でどうにか支えられているバランス。

結婚したら、わたし専用の男が手に入るのだと思っていた。

他の誰にも取られることのない男。わたしだけを滅茶苦茶に愛して、ずっぷりと幸せのゼリーで包みこんでしまう日々。そんなものが薔薇色をして待っているのだと、無邪気にも真剣に信じていた。

けれどそこにあっただのは、生活という名の日常だった。夫は確かにわたし専用の男で、わたしも夫専用の女だ。けれど、それだけ。わたし達は家族の名の枠に組み込まれ、愛だの恋だのという海から放り出された。それらが一切ないわけではない、けれどわたしは結

婚してしまえば、それらの海で溺死できるとうつとりしていたのに。そうはならなかった。それどころか、わたしは夫を手に入れてからも他の男の人を好きになったりする。公くんを好きになったように気になる男の人とすれ違えば振り返る。結婚したら、夫以外に恋なんてしなくなると思っていたのに。

「ゆかりさんはさ、小さい子供みたいだね」

ソファに横になった公くんの胸に、自分の頬をすり寄せる。公くんの腰にぺったり座って、上半身を折り曲げて。

「背が低いから？」

「甘えんぼうだから」

末っ子、と聞かれて、長女、と首を振りながら答える。

「嘘、そんな甘えんぼうなのに」

「公くんは甘やかし上手だから、お兄ちゃん？」

「姉ふたりの末っ子」

「信じられない」

公くんの胸から顔を上げて、思わず顔を見た。涼しげな目を細めて、にっこりと笑う。彼の肌はつるつるとしていてぴかぴかだ。若い、ということ。彼を覗き込んでいると、自分まで若返った錯覚に陥る。手を伸ばして頬に触れる。貧弱なひげしか伸びないという彼の頬は、わたしのてのひらに吸いつく。

「キスしてもいい？」

「いいよ、と言ってもらって、わたしは手をどかす。今まで触れていた部分に、唇を押し付ける。

「キスじゃないじゃん」

「え、じゃあなにがキスなの？」

「唇と唇でないと、それってただの接触」

接触って言葉はつまらない、と思った瞬間、わたしを乗せたまま公くんはがばりと腹筋で半身を起こした。小さな悲鳴は上げるけど、彼の腕がわたしの背中をきちんと支えていてくれたことは分かっている。

「キスは、こう」

ゆつくりとまたたきをした彼の顔がそつと近付く、唇は軽く開かれていてそれを見ていたらとろりと眠くなった。

公くんの匂いがする。

唇が重なる瞬間、いつも思う。最初だけためらいがちな舌は、すぐに強気になってわたしの中に進入してくる。絡んで、引いて、離れて、笑うように焦らして。彼の唇はやわらかい。彼の舌は肌理が細かくて丁寧。わたしは公くんのような口の持ち主に、食べられてしまいたいと思う。きつとすみずみまでしっかり味わってくれるだろうから。

キスはするけれど、わたしと公くんはそれ以上をしたことがない。不倫になってしまふからだとか、倫理的に問題があるからだとか、公くんがそういうことを好きではないとか、わたしが拒むとかそういうたことではなく、ただ自然とそれ以上の関係にならなかった。公くんのものを口に含んだことはある。みつちりと硬くて、質量があった。大きい、と思わず言ったら、平均値です、と静かな声で言われた。誰と比べたの、と言われたようで恥ずかしくて、わたしは返事ができなかったことを覚えている。稚拙な技量では公くんを解放することができなくて、けれど彼はそんなに上手過ぎたらかえって嫌です、というより女性に口でしてもらうのなんて初めてだから緊張し過ぎてるんです、とわたしの髪を撫でてくれた。

きつと、なんとなくしてないので、いつかなんとなくしてしまうのかもしれない。したくないとは思っていない、けれどどうしてもしたいとも思わない。そんな、曖昧さがふたりの間の空気もぼんやりと染める。夫といるときとは別の空気。わたしは公くんの顔が好きだ。メガネをかけてくれたらもつと好みになるんだけど、というのは内緒のまま、すっきりとした無駄のないそれぞれのパーツ、その配置の絶妙さを好ましく思う。わたしは公くんの身体が好きだ。無駄なお肉のない、すんなりとしたライン。骨格がはっきりと男の子のそれで、長い腕としなやかな指を持っている。その腕に

すつぱりと包まれて、その指で髪をすいてもらっ幸福感。

「公くん、好き」

「人妻がそういうこと言うのはダメです」

「……意地悪」

「俺はゆかりさんを好きだけど」

「ずるい」

「俺はいいの、誰のものでもないから」

「わたしだつて、」

本当は誰のものでもない。わたしはわたしだ。自分の人生の責任を誰かに預けるつもりはない。

「……人妻と、キス、するくせに」

「キスはいいの、気持ちいいから」

「じゃあそれ以上は？」

「ゆかりさんがしたいなら。気持ちいいなら」

「……人妻つて、制限ばかりでつまらない」

「あなたが望んで手に入れたもののなに？」

言われてぽかんと口が開く。確かに。そうだけれど。だけど、結婚した後で公くんに出会ってしまうなんて知らなかった、誰も教えてくれなかった、神様はタイミングをずらした。なんて、信じてもない神様の悪口を言う。

「望んでいたものが、本当に欲しかったものとは限らないでしょう？」

手に入れた途端、色あせてしまうものはたくさんある。掴まなければ美しいまま輝き続けたはずのものが、手の内にしたばかりに呼吸を止めてしまうことだつて。

「持っていないから欲しかったけど、本当はそう大したものではなかったものだつて、いっぱいあるでしょう？」

公くんは黒目をぐるりと回して、考えるような難しい顔になった。眉間に微かなしわが寄る。だから、わたしはそこに人差し指を突いて、ぐりぐりとほぐす。

「痛いよ、ゆかりさん」

「じゃあ笑ってよ」

彼の頬を両手の親指と人差し指で軽くつまんで、やわらかく引つ張る。こねくり回す。口角が上がったり下がったりして、やめなさい、の彼の声が、やめなひやい、になる。

わたしは夫と別れたいわけではない。そんなことは一ミリだっと思ってたことはない。好きだとも思う。恋だとかそういう甘やかな感情とは別の次元で。だけどわたしの女の部分が、甘やかなものに憧れる。穏やかな波だけでは、船は進まない。留まり続けるのを幸せと思う人間と、前進でも後退でもいいから違う景色が見たいと切望する人間とがいるのは仕方ないことだと思う。

「笑うから、やめて」

わき腹もくすぐりはじめると、公くんはたまらないといった表情で顔をくしゃくしゃにし、笑い転げた。身をよじるのでわたしは振り落とされそうになる。どんなに崩しても、この子の顔が好き。夫もつるりとした顔の人だけれど、公くんの顔はもっとシャープで無駄がない。シンプルなのがいい。好きか嫌いか。キスがしたいかしたくないか。分かりやすいと日常の混乱は少し減る。穏やかに過ごしたいと、願わないわけではない、けれど。恋をしたいと叫ぶ声がわたしの中にある。それはきつと、ずるい、とか、貞操感がない、とか言われる部類のことなのだろう。だからわたしは公くん以外には言わない。好き、なんて。他の誰かに、公くんを好きだなんて聞かせる必要はない。言葉は必要な人にだけきちんと届けばいい。祝福の言葉も、呪いの言葉も。

「ゆかりさんっ、」

やめなさいって、と短く叫んで、公くんはがばりと半身を起こした。彼にまたがってたわたしは思わず体勢を崩すけれど、あの長い腕がきちんとわたしの背を支えていてくれたことを知っている。

「キスしてあげるから、もうやめて」

「キスって便利ね、お願い事にも仲直りにも使えて」

「まあね、ケンカの合図にキスはしないよね」

不幸になるためのキスはあったとしても。

ゆるゆると重なる公くんの唇に、うつとりと目を閉じる。さりげない振りをして触れてみた公くん自身は、くつきりと形をはっきりさせて服の下で窮屈そうにしている。

「……好き」

言葉は舌の上で溶ける。やわらかく、甘く。本当の言葉はいつだって金平糖より甘い。時々、トゲが痛かったとしても。

公くんを餌付けして、わたしはどこに行きたいのか分からない。

ただ、彼の唇は気持ち良くて、体温は適性。大きな手は繋ぐと安心する。

「好きってだけで世界が完結したらいいのにね」

「なんか心中でもしそうな言い方」

「しないよ、だって公くんはわたしのこと、そこまで好きじゃないでしょう?」

ゆるゆると口角を持ち上げて彼が笑う。

もう一度唇を重ねて、すべては曖昧になった。わたしの存在も、

曖昧になって空気に溶ければいいのに。

「好きだよ、ちゃんと」

公くんの甘い言葉に頷いた、それが嘘かどうかなんてことは、どうでもいいことなのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8797m/>

恋をしないなんてことはない

2010年10月8日13時48分発行